



## 日本医学ジャーナリスト協会賞 授賞式と受賞記念シンポジウム

### ■「オリジナリティ」「社会へのインパクト」「科学性」をモノサシに

総合司会・杉元順子（日本医学ジャーナリスト協会副会長）：皆さん こんにちは！

第1回日本医学ジャーナリスト協会 協会賞の授賞式を始めます。日本医学ジャーナリスト協会賞は、協会の設立25周年を記念して、質の高い医学・医療ジャーナリズムを根付かせるために創設しました。今回 全国から35点の応募をいただきました。

その中から「オリジナリティ」「社会へのインパクト」「科学性」を基本的な審査基準として、協会内の審査委員会が慎重に審査させていただき、第1回受賞者として4組の方々を選ばせていただきました。

水巻中正会長から、受賞理由を記した表彰状とともに記念のトロフィーをお渡しし、引き続き、審査委員会担当の大熊由紀子さんの司会でシンポジウムを開かせていただきます。



杉元順子さん



左上／大賞：山陰放送テレビ総局テレビ制作部『生きることを選んで』のディレクター佐藤泰正さん  
右上／大賞：下野新聞2025年問題取材班『終章を生きる 2025年超高齢社会』のキャップ山崎一洋さん（右）  
と、飯島一彦編集局長（中央）  
左下／特別賞：タバコ問題情報センター『禁煙ジャーナル』（月刊紙）編集長の山崎文学さん  
右下／特別賞：特定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構・コンボ メンタルヘルスマガジン『こころの元気+  
（plus）』（月刊誌）編集長の丹羽大輔さん（左）と、コンボの共同代表宇田川健さん（右）

大熊由紀子：では、素晴らしい活動をなさいましたみなさまを迎えてシンポジウムを始めたいとおもいます。一番バッターは、はるばる松江からお越しくださいました山陰放送の佐藤泰正さんです。受賞作『生きることを選んで』についてお話しくさいますか？

## ■ALS になった先輩、谷田人司さんと一緒に、想いを生かす番組づくり

佐藤泰正さん：この番組の主人公はALS患者で、わたくしども山陰放送の元報記者、谷田人司、50歳で、私の先輩にあたります。現在も、在宅で番組の企画などの仕事をしています。この席では谷田さんと呼ばせていただきます。

谷田さんは2008年、ALSという難病を患って、身体が次第に不自由になりました。そして、会社で仕事ができなくなって、自分の目の前から姿を消してしまいました。制作の動機はこのことが、個人的にひっかかるといえますか、気になっているといえますか、そういうふうな状況があつて、なんとか谷田さんの想いを、番組にできないかということはずっと考えていたわけです。

そして、番組にするにあたってはやはり谷田さんは会社にいる間はずっと、報記者でしたので、おそらく自分の病気ALSのことについてどんどん追求していきたくらうと。それからALSというのはご存知のとおり身体がどんどん不自由になっていく病気ですので、その中で自分の命というものを見つめ、考えているのだらうと思ひまして、それを谷田さんの方にぶつけてみたところ、やはりそうであると。そこで、谷田さんと一緒に番組作りができないかという風に発想したわけです。

では5分程度なんですけれども番組のさわりをみていただければと思います。



記者時代の谷田人司さん

## ■意識が鮮明なまま、身体が一切動かなくなる完全閉じ込め症候群

番組上映 (Na は、ナレーション)

Na：豊かな水をたたえる宍道湖。水の都として知られる、島根県松江市の象徴だ。

Na：去年の夏、谷田さんは体調のすぐれない日が続いていた。

谷田さんの声風 Na：体幹が弱り飛行機に乗れなくなる。遠出は夏のうち。

Na：谷田さんには最後の機会に、どうしても取材したいテーマがあつた。それは、TLSについてだ。

Na：TLS。完全閉じ込め症候群。身体の麻痺が極限まで進み、意識が鮮明なまま、身体が一切動かなくなる状態だ。

Na：進行が早い谷田さん。近い将来自分は、今は動く手や指、眼の動きが止まり、TLSになると考えていた。それはパソコンをはじめ、視線や指で文字を指し示す、文字盤も使えなくなり、意思をまったく表せなくなることを意味する。

Na：谷田さんはTLSになった東京の患者家族に、取材依頼をしていた。

谷田さんの声風 Na：私は、楽に死ねる方法があれば、TLSになれば死なせてほしいと、思ったことがありました。私は進行が早いため、数年で、TLSに突入してしまう気がしています。TLSになっても生きること、どのような意味があるのか、質問させてください。

鴨下章子さん(妻)：こんにちは。

谷田佳和子（みわこ）さん（妻）：こんにちは。はじめまして。

鴨下章子さん：はじめまして。

Na：谷田さんは、鴨下雅之さんの家を訪ねた。

鴨下章子さん：主人です。

谷田佳和子さん：こんにちは。

Na：ALS患者の鴨下雅之さん52歳。5年前、最後まで残っていたまぶたの動きも止まり、TLSになった。

谷田さん（佳和子さん代弁）：鴨下家はどんな家庭ですか。

（笑い声）

鴨下俊也さん（ご子息）：お父さんがこうやって、家にいてくれて、それを中心にこの家っていうか家族がまわっているというか。なんか、自分勝手な考えしちゃうと、このぼくとかお兄ちゃんのために、生きてくれているというか、そう思うと、尊敬できると。

谷田さん（佳和子さんが代弁）：TLSになっても、生きる意味とはどういうものか。

鴨下章子さん：分かりやすく言えば、一緒に歳とりますよね。

谷田佳和子さん：ああ、そうですね。

鴨下章子さん：うん。白髪も増えるし、おでこも広がってくるし、色つやもかわってくるというの。私もありますけれど子どもも一緒に。そういうこともやっぱり生きていればこそですね。写真の中だったら、歳は絶対とらないからね。まったくそこは違う。

谷田佳和子さん：じ、じ、じっかん？した？ 生き続けるのはいいなと実感したって言ってますね（笑い）。

鴨下章子さん：でもねえ、辛いことも多いですよ。

Na：谷田さんはこの夏、もう一つの旅に出た。目的地は、これまでに40回以上訪れた、北海道。学生時代、休みを利用してバイクで走り、牧場のアルバイトに、汗を流した。

Na：そして谷田さんは、札幌の時計台に向かった。谷田さんは北海道を訪れるたび、時計台の鐘の音を聞きながら、自分の人生について考えてきた。

（鐘の音）

Na：そして鐘が鳴ったそのとき。

（鐘の音）

谷田さんの声風 Na：今日、鐘の音を、涙なしには聞けなかった。この音を聞き、本当は生き抜く自信を持てていないことに気づいた。時計台の鐘が、俺の背中を押す。TLSを恐れずに生き抜けど。

Na：谷田さんは、文字盤を指差した。

谷田佳和子さん：つよく、いき、ぬく。

映像ここまで

大熊：ありがとうございました。

佐藤さん：この番組の放送後には、付けました資料にも書きましたけれども、民間放送教育協会さんのホームページにですね……、

大熊：みなさま、お手元の、この資料をごらんください。(資料は文末に掲載してあります)

## ■ホームページがパンクするほどの大きな反響が

佐藤さん：はい。放送直後に150数名の方が書き込みをしてくださいますしてホームページが一時つながりにくくなるというふうな状況になったりしました。非常に熱心に観ていただいたということで制作者冥利に尽きるといいますか。そのような気持ちになりました。あと、この民教協は事務局がTV朝日さんなのですが、TV朝日さんに多くの視聴者の方が再放送を求める電話をかけてこられて、その結果、BS朝日さんですとか、東京MXテレビさんなどでも再放送をさせていただきました。

また、反響としましては、医療系の学校や中学校、高校、大学の市民講座など教育機関の方から、DVDの貸し出しをしてほしいという要望が、ずいぶん寄せられておまして、今も続いているということです。ところで、主人公の谷田さんですが、まだ到着していません。谷田さんはきょうの会にあたってコメントを書きましたので、ここでご紹介します。

## ■谷田さんが1日以上かけて打ったメッセージ

「このたびは『生きることを選んで』を、第一回日本医学ジャーナリスト協会賞、大賞に選んでいただき、大変光栄に思います。同僚の佐藤ディレクターのおかげで、番組内で記者として取材させていただいたことは、記者冥利に尽きます。生きる意味とは何か、深く考える、得難い経験をさせていただき、感謝しています。私は一昨年9月に、気管切開したうえで、人工呼吸器をつけました。

この重大な決断の決め手は、セカンドオピニオンで人工呼吸器を着ければ、寿命まで生きられると言われたことです。告知の時は、余命が3年から5年といわれ、夫婦で大泣きしていましたので、一筋の光明が見えた気がしました。この2年半の間、もし死を選んでいけば、子どもたちの成長を見ることはできませんでしたし、楽しいことを経験したり、生き甲斐を感じることもありませんでした。何より家族とともに、歳を重ねることもできませんでした。

しかし私は今まで、しばしば生き抜く決意が揺らいでいました。緩和ケアを医師にお願いしたこともあります。痰の吸引を拒み、窒息しようとしたり、自分で呼吸器のチューブを外したこともありました。病の進行の辛さから、家族愛を忘れてしまうこともありました。そんな時に励ましてくれたのが、妻や訪問看護師さんなど、周りの方です。話を聴いてくださり、ずいぶん救われました。私はこうして、心がぶれながら、生き抜く決意が固まっていくのだと思います。

一方、生きる前提として、社会的介護が必要です。ヘルパー、訪問看護、入院を受け入れる病院といった、社会的介護がないと、患者は家族が疲弊すると気を遣い、死を選ぶケースがあり得ます。

家族の絆があっても、療養環境が整わないと、生きることを断念することもあり得ます。現状は、介護医療体制の地域格差があり、大きな問題となっています。こうした問題が解決に向かい、生きようと願う患者が増えることを願っています。」

(拍手)

大熊：ありがとうございました。

谷田さんは、ご自宅では、いまも、パソコンを操っておられるのですか？

佐藤さん：番組のための取材をしていました去年に比べると、だいぶ、こう、パソコンの操作が難しくなってきたてはいますが、ゆっくりゆっくりと、打っています。いま読み上げました文章は、たぶん相当な時間がかかったんだと思います。これだけ打つには丸一日以上かかったんじゃないかと思うんですが。

大熊：いつも使っていらっしゃるパソコンを東京まで持ってきていただくのは大変なので、透明な文字盤を使って、質問に答えてくださいます。何を質問しようかなって、心の中で考えておいていただきたいと思います。

ところで、この番組の録画が教育関係でとても、使われているそうですね。この番組の推薦者は複数いらっしゃるんですけども、東京医療保健大学の先生、真野響子さん、いらっしゃっていますか、ちょっとお立ちくださいませ。

推薦者のお一人で、学生さんの教育に使っていらっしゃいます。

録画したDVDはどうやったら貸していただけるものなのでしょうか。

佐藤さん：民間放送教育協会さん、文科省認可の財団法人として、教育目的のDVDの貸し出しを事業の一つとして行っておられます。申し込み手続きをしたら貸し出しができるということになっています。

(<http://www.minkyu.or.jp/> 〒106-8001 東京都港区六本木6-9-1 テレビ朝日内)

## ■仕上げをしている時に、食道静脈瘤が破裂し、「生きる意味」を身をもって

大熊：今日ここに、番組の構成をなさった金杉文夫さんがいらっしゃっています。こちらへあがっていただけませんか。

番組を構成をする上で、どんなことを考えながらされたか、それから制作の最中にご自身が死線をさまよわれたとうかがいましてそのことについてもお話いただけるでしょうか。

金杉文夫さん：先ほど、佐藤ディレクターの方から、民教協の話が出ましたが、大変名誉なこととして2年続けてですね、昨年は青森の巖月というところの限界集落で番組をつくりました。

今回は、谷田さんを中心とした、ドキュメンタリーをつくったわけですが、私は放送作家ですので、一人でも多くの方に観てもらって視聴率をとりたいたいというのは、35年近くやっているんですが、自分に課しています。その中でも、このALSに関しては、私の、本当に親しい友人が、3年前、亡くなっています。とつても思い入れがあった作品です。

最後の仕上げで佐藤さんには、大変迷惑をかけたんですが、ナレーションを書いている、最後のナレーションの仕上げをしている時に、食道静脈瘤が破裂しまして、で、浦安の順天堂大学病院に担ぎ込まれました。で、私自身、



金杉文夫さん

ずっと構成打ち合わせをしていて仕上げの段階までいって、谷田さんの言っていた生きる意味っていうのをどれほど真剣に考えていたかなとは、自問自答したんですけど、ストレッチャーに乗っていて、それから50日間入院している間に、生かされているんだなというのは少し感じました。

そもそも私が吐血したときに、妻がそれを気づいてくれたんです。私自身はもう思考能力が低下していきまして、血を吐いたと分からずに、貧血状態でトイレに倒れていたんですね。妻が救急車を呼び、まあ、結果として助かるんですけども。

今回の谷田さんの作品でも、奥さんの美和子さんが、時に夫婦喧嘩をしたり、同じ列車に乗りあった運転手と、乗客ではなくて、切符を切る乗務員、という、その心の変化が、少しでも描ければいいなと、思っていて、最後まで関わられたことを私自身、とても誇りに思っています。

**大熊：**ありがとうございます。命を救った奥様の優子さんが会場にきておられます。奥様、お立ちになってお顔を見せてくださいますか。命の恩人でいらっしやいます。

どうもありがとうございました。

(拍手)

※②へ続きます